【人権の窓―5】

結婚した二人を祝福したい

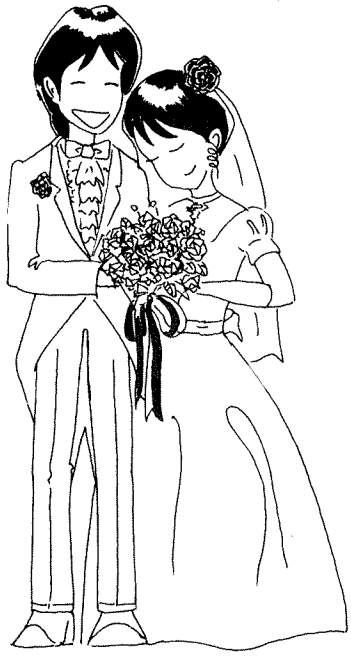
5年ほど前のことです。私は体調を崩した父の代わりに、父の旧友の息子（あきさん）の結婚披露宴に出席しました。披露宴会場は200人近い招待客でいっぱいでした。そして、新郎あきさんと新婦ともさんは、そのすべての人々に祝福され、笑顔がいっぱいの、結婚披露宴の中にいました。しかし、私にとっては、面識のない二人であり、型どおりの「おめでとう」しか言えない披露宴でした。

ところが数日後、父の旧友の親戚に当たる、私の職場の友人から、この披露宴に至るまでのエピソードを聞かされたのです。その内容は次のようなことでした。

あきさんとともさんは、同じ町に住み、中学そして高校も同じ同級生でした。いつしか互いを一生の伴侶として意識し、結婚を約束しました。そして、それぞれの両親にも紹介し合いました。

あきさんの両親は、ともさんに初めて会った日、明るく気だてのよい人と好感を持ち、「息子はいい人を選んだ」と二人で語り合いました。また、ともさんの家も二人を祝福し、結婚の話が進んでいきました。でも、あきさんの両親には少し心配なことがありました。それは、ともさんが同和地区出身であることを理由として、差別するはずのない親戚と信じながらも、二人の結婚に反対する人が出てくるのではないかということでした。

そこで、両親は二人の結婚をみんなに温かく祝福してもらえるように、親戚にも話しました。はじめに兄に話しに行きましたが、「おめでとう。喜んで結婚式に出させてもらうよ」とはっきりした口調で言ったのでした。この一言で、両親の不安はいっぺんに吹き飛びました。



そして、他の親戚の人達も二人の気持ちが一番大事だと祝福してくれました。あきさんの両親は人を疑ってしまったことを恥じ、周りの人達の人権意識が高まっていることを心から感じ、清々しい気持ちで結婚式を迎えることができました。

私はこの話を聞き、互いをかけがえのない伴侶として結婚した二人を、心から祝福する人達とともに、この披露宴に出席できたことを本当にうれしく思いました。

［平成11年（1999年）12月　長野県教育委員会発行　同和教育つうしん　第21号］